

## 宗教的對象としての歴史的人格

菅 圓 吉

宗教的對象としての歴史的人格なる宗教學一般の問題を、私は今、此處でキリスト教の立場より論じようとする。かくする事は、歴史の中に神の啓示を見るを其の特徴とするキリスト教の神學に於ては、その信仰と宗祖の歴史性が特に密接に關係し、且又、此の問題はキリスト教の新教神學者達によつて學術上模範的に取扱はれてゐると、私が信じた爲めである。然し此の論文が示すであらう如くに、私の引く結論は、やがて又廣く宗教學一般の立場に歸り來る事によつて、私は、一の特定なる宗教を取扱ひつゝも、其の根抵に於ては、やはり廣く宗教學一般の問題に觸れてゐると考へる。

古代のキリスト教教理が仆壞し、中世の教會文明が瓦解して、近代の學術の勃興と共に、キリスト教信仰に決定的な影響と變化とを惹起したものは先づ第一に、歴史學

の上に立つた聖書批評であつた。

歴史的批評には無關係に率直に、古い教會的教理をそのままに受容れる者には、永遠なるロゴスとしてのキリスト、その本質に於ては時間と歴史とを超越した絶對なる神性に屬するイエスは、その信仰の對象となり得るは云ふ迄もない。

然し、聖書の研究に、批評學と歴史的心理学とが入り來つたと共に、イエスは永遠、絶對、超歴史の世界より、有限相對歴史の世界へ引下げられた。勿論、一方では、歴史學がイエスに關する文書を批評的に取扱ふ事によつて、イエスの生涯と人格とは正確に又、歴史的に解明され、その結果、イエスは一層親しく人間に近附けられ、従つて又人間にとつて一層強い方とはなつたが、他方では、人々は敬虔なる確信の上に學術的批評的問題を積み重ねる事が如何に苦しいかを經驗せねばならなかつた。此の事は、理論者やライマルスの時以來、特に避け難き困難となり始めた。そればかりでなく、歴史批評學の結果は、イエス自身、及び彼に續いた原始教會の思想が、近代の宗教的倫理的立場とは異つた、即ち古代の通俗の、世界觀、ユダヤやその他の東洋諸國の宗教觀及びアポカリプシスの終末觀的思想の上に立つ事、又、イエスのキリスト教は、その當時の學術と文化と密關せる地上の道德と妥協した、教會のキリスト教とは異つたも

のである事を明にした。かくて、イエスの神觀、人生觀、特に倫理觀は、尙ほ現代に適用し得るであらうかと問はれねばならなくなつた。若し是に肯定的解答を與へむとすれば、歴史的に制約されたイエスの姿、イエスの教より、永遠なる價値を抜き出さねばならぬ故に、今迄、教會が權威をもつて追つたイエスに對する單純なる宗教的態度は不可能となつた。

更に、批評學に於ける Quellen の研究が、古代言語學の影響を受けて一層複雑となり來りし爲め、イエスに就ての歴史的認識の確實性が脅され始めた。否、言語學者達は、恐ろしい勢を以て、従來の狭い保守的見地と宗教的束縛とを突破して、イエス及びイエスの福音に就ての歴史的認識の不可能をさへ主張した。かくて、ストラウスの『イエスの生涯』以來、次第に其の論法を鋭くし又過激に進めた學者達は、イエスの生涯に關する問題を全然、不可解として斷念し、學術的研究の可能を有する範圍をば、イエスの説教にのみ限つた。然し、遂には又、其の説教の認識をすら不可能とせしのみならず、イエスなる歴史的存在をさへ疑ふ極端に過激な結論が引出されるに到つた。かくて、今や、歴史的事實と信仰とを結付ける事は困難否、不可能となつた。今述べた、イエスを非歴史的存在とする見方、並びに、イエスの説教の認識の不可能を主張する

見方は、余りに行き過ぎた結論であらう。然し、私は今、此處で、一々、此等の歴史批評學の研究の結果を評價する暇を持たない。唯だ、一般にかゝる疑問を惹起する可能性、否、必然性を持つた或は、かゝる質疑から永久に離れる事の出来ないでもあらう處の、歴史的對象に對して、我々は尙ほ常に宗教的態度をとり得るであらうか、と云ふ事よりして、現代のキリスト教神學の重大問題が起り來るのであるを明にすればよいのである。

此の歴史批評の結果と相並むで、宗教的對象としての歴史的人格なる神學問題に、等しく決定的結果を與へるは、近代人の宗教思想の根本豫想たる宗教の合理主義とも稱せらる可きものである。

古い教會的信仰、即ち、神の化身、キリストによつて制定された教會と聖奠及びキリストの贖罪に就ての信仰、換言すれば、神と人類とを和解し、それによつて人類をば原罪 (Ursünde) の毒殺力より解き放つキリストの救濟及び、かゝる救濟は教會の組織の中に於てのみ可能であるとの信仰は、近代人には最早や無意味となつた。近代人には、キリスト教とは、先づ神に就ての不斷に新しき生ける信仰であり、救濟とは、不斷に新しく神が人間の心靈に働く事であつた。即ち、キリスト教は、一定の神の信仰、若し

くば、實際的生活の規範を伴へる、獨特なる神に就ての認識、更に換言すれば、一の宗教的理念、乃至宗教的原理であつた。而して、かゝる信仰は、理論的に又は哲學的に解される必要もなし、又、一般的世界觀を伴ふ必要もない。それは唯だ、神、及び神が世界と人類とに對する關係に就ての信仰として倫理的宗教的生活原理として全然、實踐的に解され、而して、それは全く經驗、感情及び內的體驗の上に基礎付けられた。かくては、然し、それは古代のキリスト教の救濟觀念を根本から變化した事は明であらう。何となれば、此處では救濟とは、神は己自身を、罪を赦す聖なる意志であると信する事、又は、神の認識によつて人間の心靈の中に働く常に新しき神の力である。従つて、その救濟とは、キリストによつて歴史的に完成された、再び繰返しのない一回的事件を意味しない。それ故に又、教會とは、此處では、聖書と聖奠とを以て、神の化身、即ちキリストが奇蹟的に制定した救濟の力を、人間に客觀的に傳達する機關ではなくして、同じ神の認識を抱く信者の自由なる團結を意味し、かゝる信仰を生長し發展せしめむ爲めには任意に如何なる形式をも取る事が出、従つて之は何の奇蹟的要素をも有しない純粹に人間的結合であるが、更に進むでは、かゝる結合をすら全然必要としない。かくては、教會の開祖として、又、教會と聖奠の奇蹟的力の根源としての歴史的イエスも

不必要となつた。そればかりでなく、かゝる神の認識は、個人の體驗と經驗の中に、即ち個人の主觀的確信の中に基礎を置くが故に、教會の客觀的傳襲的信仰は個人の主觀的感情へと遷り行き、個人が神の意志を實踐的に認識する事のみよりして起る此の救濟は必ずしも一般に歴史的事實そのものを必要としなくなつた。

此の近代人の宗教的態度の根本豫想は、然し、既に古代及び中世の教會内に於て、神の信仰を單に客觀的に事實的ではなくして、主觀的に內的に基礎付けようとの試みが現はれた際、屢々、暗示され、特に新教の心靈主義者達 (Spiritualisten) によつて明に又鋭く表現されたのであつた。而して此の合理主義は、心靈主義者及び、ソシニアン、人道主義者以來、歴史批評學と結付いて、共に、罪に墮せし世界をば一の特定なる歴史的事件によつて奇蹟的に救ふとの教會の實證的救濟說に反對して、救濟の觀念をば、キリスト教の神の觀念と其の認識に伴ふ倫理的行爲と考へ始めた。かくて、エラスムス、ソシニよりロツクライブニツツに到る迄の神學者達は、唯だイエスの歴史的奇蹟がキリスト教の眞理を傳達し又確信せしめねばならないとの意味に於て、キリスト教に歴史的事實の必然性をゆるした。然し、それに續いたレッシング及び、カントは、かゝる理由の皮相なるに満足せず、進むで、イエスの歴史的事實は、キリスト教の眞理

を歴史の中に導入する單なる方便とのみ解し、従つて、かゝる理念そのものは一度、歴史に導入せらるゝや、己自身の力によつて立ち、又、己を完成するもの、換言すれば、かゝる理念は、純粹なる道德意識が何の學術的證明にもよらず唯だそれ自身、自發的に、又、必然的に要求するものと考へた。従つて、歴史的事實は單に例證ではあり得ても、證明ではありえなくなつた。

此の思想は、ヘーゲル及び、その學派によつて徹底的に表現さるゝに到つた。彼等は、宗教的信仰が歴史よりして生起する事は認めしたが、その信仰の内的眞理と妥當性とは之を歴史的事實の上に基礎付けなかつた。神と人との融合の認識としてのキリスト教の根本原理は、此の原理の完成、又は歴史の出發點としてのイエスの人格より明に區別された。此の立場はビーデルマン、ブライデラア、及び新フリース派、新ヘーゲル派の神學者達によつて、今、尙ほ其の勢力を失はないのである。

然し、又、歴史と理念、人格と原理との區別を明白にしないで、むしろ兩者の乖離を緩和し、又、調停しようとの試が出でた。そはキリスト教の救済にとりて歴史的人格が絶對的と迄は行かずとも、相對的に必然なるを主張するのである。此の思想は古代教會の傳襲的信仰、即ち歴史の奇蹟によつての救済なる觀念を排斥して近代の宗教

觀即ち、神が不斷に新しく個人の心靈に救濟を働くとの信仰に左袒する。然し、その際この救濟にはイエスなる歴史的人格に就ての明かな智識を有し、その人格を眼前に生々と描き出す事が必要であると説く。而して此處で云ふ歴史的人格とは、イエスの奇蹟とか彼の個々の言葉でなくして、イエスの全人格より流出づる宗教的印象又は感化を意味する。聖書の中に生きた繪として描き出された歴史的人格の暗示方あるによつて、始めて力強い信仰が生起するのであつて、イエスの人格的感化と印象なき、單なる理念、原理、又は豫感のみでは、感激と靈感と實踐的力とを持來す不斷に新しき救濟は不可能である。

此の思想は先づシユライエルマツヘルによつて基礎を置かれ、その後、リツチル及びヘヤマンによつて受けつがれ、又、發展せしめられた。リツチルは歴史的人格の代りに罪をゆるすイエスの權威を高調した。イエスは、かゝる權威によつて神の國を建設し、而して、教會はイエスの權威を傳達する事即ち、イエスによつて罪が赦るさるゝとの確信を與へる事によつて眞の救濟を完うすると説いた。ヘヤマンは、イエスなる歴史的人格が強い宗教的力であらむがためには一定の前提を必要とした。即ち、人間は、生活の、特に良心の奮闘と苦戰との眞中に於てのみ、イエスをば罪を赦し、又、



洗ひ清める神の救済の力の唯一の啓示と信じ得た。

此の、トレルチによつて Schleiermacher—Ritschl—Herrmannschen Vermittelungstypus と呼ばれた思想は、キリスト教か一回的な歴史的事實と奇蹟的な恩寵の方法とによつて救済ではなくして神の實踐的認識、又は、理念である事を明にしたが、又、この宗教的理念が效力を現示せむ爲めには歴史的人格と結び付けられねばならぬ事を、即ち、歴史的人格があつて始めて理念は力と確信とを與へるをも主張した。

然し、かゝる見界には種々なる困難がある。先づ彼等の「イエスの事實」なるものは我々が一般に云ふ事實ではなくして、唯だ信仰の立場よりして見られた事實である。従つて、かゝる事實は、歴史批評の立場より考へる人には不<sub>レ</sub>明白、内<sub>レ</sub>至、不<sub>レ</sub>可解である。かゝる見界は、純粹に歴史的な聖書研究のもとに生起したものでなく、教義學に基いたものである。而して、教義學、又は組織神學の立場よりして云へば、此の見界に於ける史的事實と信仰との關係の內的必然性は相對的、内<sub>レ</sub>至、不徹底である。何となれば、そは、史的イエスの他に、キリスト教の生命の流れと其の力とを附加しつゝ、又、かゝる生命の流れと力とは、無力にして罪に迷へる人間に於ては史的イエスの暗示的靈化力なくしては不可能であるから。而して、此の事は又明に古の原罪の教を默認して

ゐるのである。然しかの、ポウロ以後、キリスト教會に於てキリスト教信仰以外の總ての光を消し、キリスト教以外の總ての宗教的力を否定し、キリストの贖罪なる奇蹟の上に立つた團隊專有の救濟の祕義を絶對化せむ爲めの原罪の教は、も早や近代人の意識を満足せしめないは論ずる迄もない。

次に此の見界は、イエスなる過去の歴史に屬する人格が、現在、我々人間同志に於けるが如くに認識せられ、又直接なる感化を及ぼし得ると假定してゐるが、それは甚だ疑問である。イエスが彼の生時、弟子達に直接なる力を與へ得たとも、イエスと現在の我々との關係は、生ける人間と人間との接觸ではあり得ない。又、若しイエスの感化が教會内の宗教的天才達によつて生きた流れとして傳達されるとすれば、それは最早、イエスの歴史的事實を取扱つてゐるのではなくして、その歴史的事實が教會の發達に伴つて様々に他物を混じ、變化し、又、豊富にされた結果を取扱つてゐるのである。而して、其の中に於て、何がイエスに獨特の要素であり、又、何がイエスに續いた時代が附加した要素であるかは、殆ど不可解である。且、又、たとへ我々がイエスの説教の根本的特質を明白に把握し得たとも、それは人間と人間との直接なる感化を與へないのは前に述べた通りである。そればかりでなく、イエスの歴史に關する批評學の結果

は、次第にイエスを神的權威神的暗示とする信仰を脅すが爲め、今や史的イエスを承認せしめるものは、むしろキリスト教的神の信仰が人間の心靈に内的に働く偉大な力であつて、その反對ではなくなつた。とも角救主として又、信仰の對象としてのイエスの古よりの位置を保ちつゝ、而もキリスト教の信仰の本質の中に新しき救濟觀念を導入しようとする試は、近代思想の根本豫想に對して内的矛盾を示すのである。

かくて、現代の一般の宗教思想は再び神祕家、心靈主義者達の思想に歸つて來た。即ち、それはキリスト教を人間の心靈の上に不斷に又、永遠に働く神の内的力であるとして、必ずしもイエスなる歴史的人格を承認するを必要としなくなつた。斯如く、生ける神の信仰と史的イエスとの内的必然性を打破し、イエスの生涯、並びに其の教に關する諸問題は之を全く歴史批評學に委ねる事によつて、近代人は、信仰の上に學術的研究の重荷を積み上げると云ふ苦痛を除うとする。これ故に、彼等が若しイエスを認めるとすれば、それは單にキリスト教の生命の流れの歴史の出發點としてゝあるか、或は、宗教教育上にのみ意義あるキリスト教の象徴としてゝあつた。

然らば、以上の事よりして我々が引き得る明かな結論は、レッツシングの第三福音、又

はイブセンの第三帝國に於て見るが如くに、宗教的信仰は、何の歴史的支柱をも要せず、全然それ自身、己が内的衝動によつて進展し又完成する力でなくてはならないと云ふ事である。

然し、かゝる宗教の發展の仕方を、果して我々は未來に於て豫見し又期待し得るであらうか。私は今、トレルチと共に此の結論を拒み又、その理由を述べよう。(E. Troeltsch: Die Bedeutung der Geschichtlichkeit Jesu für den Glauben. は此の點に於て、又此の論文全體の構想に於て、私に多くを教へた)

偕、キリスト教の理念が純粹に内的信念の方にのみよつて、己自身、發展すると云ふ事は、云ふ迄もなく宗教に於ける團隊と儀禮との意義を見てゐない。信者が宗教の開祖、又は、權威者に於て結合しようと思せず、唯だ己の現在の個人的確信の上にのみ立たうとするのは、意識的に又、無意識的に宗教團體を放棄する事である。而して宗教團隊は、その團隊共通の所有としての精神、又は理念を、宗教團隊の規範としての宗祖によつて生きた人格として説明する事、即ち儀禮、なくしては成立しない。而してキリストのもとに集る團隊と、キリストに於て神を禮拜する儀禮とが排除された處で

は、孤獨な個人の祈禱と冥想、個人の宗教的熱情の無政府的偶然的表現及び個人の合理的宗教論が入るであらう。然し、かゝる仕方に於ては、信者の確信に根柢を與へる力強い中心點があり得ない否、求め又感ずる個人の數だけの中心が現はれ來るが爲めに、それは個人的、熱情的ではあらうとも、偶然、不定、混沌に陥り、理智的形而上學的ではあらうとも、薄弱、無力となるのである。團體とその集團的精神を有しない宗教は、高揚的獎勵的統一的力を有してゐないとは、宗教學、特に宗教史と宗教心理學の研究の結果が明かに示す處である。

抑、全然、同じ様に體驗し、同じ様に思考する多くの個人が相互に何の關係も連絡もなくして孤立的に並立すると云ふ事はありえないのであつて、それ等の個人は様々に相關連し係絡して一の團體圏をつくり、その團體圏は上層と下層とに分たれ、而も亦、それは一の具體的中心點を要求すると云ふ社會心理的法則は、又、宗教生活にも妥當するのである。即ち、生きた宗教は、一般に、一定の上層と下層及び堅い中心を備へたかゝる團體圏をつくり、それあるによつて、宗教の力は更に深く又廣く生長し發展し得るのである。一々、具體的例を引く迄もなく、明かに、宗教學は、自然宗教に於ては古い儀禮の傳承が結合點となつて團體が形成され、精神宗教に於ては預言者や開祖

の人格が中心となり、彼等を禮拜する團隊と儀禮とが形成される事を教へる。それ故に、若し新しき生命あり又力ある宗教が出現するとならば、それは確に個人の宗教的確信を全然、個人的に發展せしめる事ではなくして、その根據をば團隊と儀禮との上に置かねばならない。全く己自身の上に立ち、自由に孤立して個人が各自に發展する、或は全く個人の内的生命より湧き出で、而して、お互に共鳴はしつゝもお互に連合するを要しないと云ふ宗教の第三帝國は一のユートピアである事は多くの個人の興味と理性とが自然的必然性を以て連結する事によつてのみ成立する經濟、及び國家の現象を見ても明かであらう。何はともあれ、キリスト教の理念が力ある實在として已を證明せむが爲めには、團隊と儀禮とを必要とする。而してキリスト教の神の認識に於て結合する團隊は常に其の中心、其の團隊の首領を求め、その周圍に集らねばならない。即ち、教理や哲學によつてははなく、キリストなる像(εἰκὼν)の中に保存されたる神の啓示に沈潜する事によつて、キリストに就ての史的傳承を生命付ける事によつて、キリストに於て神を禮拜する事によつて、その團隊は己を養ひ又力付けるのである。

かくて、我々はトレルチと共に社會心理學的立場よりして、歴史的人格が宗教的儀

禮、宗教的力とその進歩發達に不可欠である事を知つた。而してキリスト教の理念を歴史的イエスを結付けるには是だけで十分なのである。歴史的イエスなくしてはキリスト教の理念の發展は考へられえない。宗教哲學は決して生ける宗教に代り又を樹立し得ない。

然し、若しイエスが團隊を統一する、一の生命の流れの中心と考へらるゝならば、かゝるイエスはキリスト教の信仰の單なる象徴にすぎないではないかの疑問が起るでもあらう。慥に、それは或る意味では象徴であるは云ふ迄もない。然し宗教に於ける象徴は屢々神祕的宗教觀に於て見られる如き藝術的幻想の遊戯の對象ではない。眞にキリスト教の生命の流れに内的に根ざした人々は、その團隊の中心、又は首領、その儀禮の統一點を、たとへ其れが如何に美しく表現されようとも、全然、一の神話とは考へ得ない。かゝる人々には神は單なる思想や可能性ではなくして、生ける聖なる實在である、従つて又、その神の象徴も生命であり力である。すべて信者には、生きた人間が誠に宗教的に生き、信じ、戦ひ、又、勝つたと云ふ事、而して彼の生命より迸り出でる力と信念とが己自身の上にも溢れ來ると云ふ事は不可欠である。従つて、かゝる

象徴は、彼等には生ける象徴である。而して象徴が眞に生きて來らむが爲めには、その象徴の背後に一の勝れた宗祖乃至預言者が立つてゐなければならぬのである。かゝる宗教的對象あつてこそ、彼等は神を明に具體化する事が出來、又限なき力と光と生命とを獲得しうるのである。

かく見來れば我々はヘヤマンの處謂『キリストの事實』が語る眞理を無視してはならないのは明かであらう。即ち、個人の救濟の確信はイエスを信仰する事によつて始めて得らるゝばかりでなく、又キリスト教の生命の流れは、イエスを中心とする事なくしては存在し得ず、而してイエスを中心として、そこより内的力と眞理とを受けむが爲めには、その中心は生命であらねばならぬ。それ故單なる宗教的主觀主義に對して歴史によつて媒介される一の人格の宗教的力を客觀的支柱となすと云ふ意味に於て我々はヘヤマン一派のキリスト論に同意するのである。唯だ然し、我々がヘヤマン一派と異なる點は、キリスト教の信仰の中に一定の歴史的事實を持ち入れると云ふ事が、キリスト教を孤立せしめると云ふ事ではなくして、反對にキリスト教を他の總ての宗教、特に精神的倫理宗教を支配する、否、更に總ての人事を貫通する一般的な社會心理的法則のもとに置くことと云ふ事である。従つて、原罪の觀念によつて



ではなく、社會心理的法則によつて、人類に於ける個人と社會との不可思議なる關係として、それは解せられねばならぬ。キリスト教がイエスの歴史的人格の上に立つと云ふ事は、キリスト教を他の宗教から區別して、己獨り救濟を與へ得るとの特權を占有する事ではなくして、人間の精神生活の一般的法則をキリスト教にも適應すると云ふ事である。

かくイエスの人格をば原罪に對する唯一の權威乃至力の根源として、全く、全然社會心理的意義に於て考察する見界は、次ぎに又、イエスの人格を歴史的原因關係の中に引き入れる事を妨げない。従つて、此の見界は歴史批評學を少しも恐れないのみか、むしろ歴史學の研究に俟つのである。既に述べた如く、宗教の中心を爲す象徴は凝固した不動の教義や道德律ではなくして、一の生ける、而して我々が多様に解釋を容れ得ると共に又我々を高揚し力強ける人格の像 (Type) である。かゝる人格より進る内的生活の流れを、我々の中に汲入れ、而して其處よりして我々は自由に我々自身の當面の道德的理想を創造し得るのである。かゝる生きた人格は、歴史の連鎖の中に立たない、孤立した存在ではなくして、歴史的生活の廣い而して豊富な關係そのものゝ中に立つ存在である。歴史的生活なくしては此の人格はキリスト教の理念

を生きた力としては示しえない。

イエスを全然、超歴史的に孤立せしめようとの試は、今尙ほ多いが、然しイエスの宗教及び道徳の思想が全くその當時のユダヤ教に負ふ事は、宗教史の學者達によつて明に證明された。又古代のキリスト教會は、イエスの精神をば歴史より分離して、それ自身にて伸び行く一の原理と見這したが、此の結論は、單に哲學的思索や組織的人世觀によつて引かれたのではなくて、むしろ、力ある強い宗教的人格の長い繼續の結果であつた。而して、かゝる人格は、丁度、イエス自身がヘブライの豫言者より生れ、又、豫言者の精神より新しきものを創造した如くに、イエスより生れ、又、イエスの精神よりして新しきものを創造したのであつた。

かゝる見地よりしては、イエスが救濟者であるとは、彼が絶對的獨一と云ふ事ではなくして、イエスに先行し、又後繼する全歴史を集中して、其れに一の統一を與へる中心點を意味するのである。而して此の事實は、既に述べた如くに、社會心理的必然性の上に於てのみ之を基礎付ける事が出来るのである。

要之、キリスト教の信仰は、たとへ其の中にプラトニスムスやストア哲學、及び其他の多くのキリスト教以外の人生觀を含むとも、それが一定の團隊と一定の儀禮を持

ち得むが爲めには、従つて又、その信仰を生命あらしめ、力強く發展せしめむ爲めには、イエスなる中心を宗教的對象となさねばならない、換言すれば、キリストの像 (Bild) をば人間世界に顯現した神の自己啓示の中心となし、キリストに於て神の最高の天啓を禮拜せねばならないのである。